ｂ．企業等とは連携しない実践型学習における取組

3. 実践型学習における取組

b. 企業等とは連携しない実践型学習における取組…１年次生クラスの取組

（１） 社会人基礎力の育成手法について

① 教育プログラムの設計

ⅰ）教育目標・位置づけ

本事業は、本学の建学の精神に則り、事業全体の目標を掲げ、その達成を一挙に図ろうとはせず、1～3 年次生の特性に応じ彼らの成長に合わせて、教育プロセスを一貫した三段階に階層化している。

このプログラムは、そのうちの第一段階のものにあたる。

第一段階：1 年次生（科目名　O／OCF－PBL１：On／Off Campus Fusion－Project Based Learning）は、第一段階の 1 年次生の教育目標としてシンキングとアクションの確立にウェイトを置く。

ⅱ）プログラム形態

企業からの課題に直接取組まない(職業観と社会の仕組みとフィールドワークの前準備) 1 年次生の PBL 型学習から、段階的に 2・3 年次生の企業からの課題に取組む実践的 PBL 型学習を組み合わせた三段階方式のプログラム体系（**図２－２**）で行う。

ⅲ）プログラム構成

日程	授業中の活動（または授業外の自主活動）	育成する能力要素
10 月 3 日 10 月 4 日	合宿（滋賀県・ﾏｷﾉﾊﾟｰｸﾎﾃﾙ＆ｾﾐﾅｰﾊｳｽ） アイスブレーク、マインドマップで自己紹介、 コミュニケーションワーク、 社会人インタビュー発表、 事前評価シート記入、アンケート	主体性、発信力、傾聴力、 柔軟性、情況把握力、規律性、 ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
10 月 12 日	オリエンテーション、遅刻欠席ゼロ Pjct	主体性、計画力、規律性
10 月 19 日	コンセンサスワーク（『月で遭難』）	課題発見力、計画力、創造力、 発信力、傾聴力、柔軟性、 情況把握力
10 月 26 日	コミュニケーションワーク （『デートプラン』を立てる）	主体性、課題発見力、計画力、 創造力、発信力、傾聴力、 柔軟性
11 月 9 日	インタビュー・アンケート Pjct　立上げ	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、発信力、 傾聴力、柔軟性、情況把握力、 規律性

11 月 16 日	インタビュー実践	主体性、働きかけ力、実行力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
11 月 30 日	中間プレゼンテーション準備	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 7 日	中間プレゼンテーション （司会等自主運営、各チーム進捗状況発表）	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 14 日	インタビューまとめ、アンケート集計 Excel レッスン	主体性、実行力、計画力、情況把握力、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 21 日	最終報告会準備／中間評価シート記入	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
1 月 18 日	最終報告会プレゼンリハーサル	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
1 月 23 日	最終報告会	主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力

ⅳ）チーム編成

◆学生の募集方法

1 年次生対象に履修ガイダンスにて告知し、募集説明会を 2 日間行い、このプログラムの狙いと仕組み、授業日程を説明し募集活動を行った。1 年次生は 3 年次までの計画とプログラム内容の説明と面談を行い、受講意志の確認をした。

◆参加学生の所属（学部・学科）及び人数

学　部	1年次生
経済学部	12名
経営学部	11名
法学部	8名
外国語学部	15名
文化学部	8名
コンピュータ理工学部	3名
合　計	57名

◆メンバー構成、役割分担等

1クラス：担当教員1名、学生29名（1年次生）

2クラス：担当教員1名、学生28名（1年次生）

FA（学生）：8名（4年次生＜経営学部1名、法学部7名＞）

授業運営には、このPBL型授業を受講した4年生が、ファシリテーション・アシスタント（FA）として8名が授業運営にファシリテータとして関わった。授業を通じての自らの経験を、後輩学生に伝えることで、双方において学ぶ場を形成する工夫を行った。

ｖ）教職員の役割分担

事業の実施体制の項（P.16）で示した役割分担と実施体制の下、企業と連携しない実践型学習プログラムO／OCF－PBL１においては、全体統括者として後藤文彦（経営学部教授、キャリア教育研究開発センター運営委員長）が担当し、O／OCF－PBL１プログラムの実施統括として並松信久（経済学部教授・副学長・キャリア教育研究開発センター運営委員）が、正課授業としての事業の実施状況を把握し、プログラム内でのクラス担当をコーオプ教育スタッフの木原麻子・吉中三智子が担当した。

授業においては、これらスタッフの他、報告会や適性検査の実施などを中心に他のスタッフもかかわり、企業と連携する実践型プログラムのO／OCF－PBL２・3と関連を持たせる運営体制をとった。

また、授業においては毎回担当者による振返り会議を行い、クラス間の運営調整を行いながら教育目標の共有を行った。

② プログラムの運用

ｉ）それぞれの授業や活動等における工夫

１.授業を進めるにあたって（基礎づくり）

◆授業開始前に合宿を実施

PBL 授業の理解、仲間づくり、規律性の意識づけを目的として 10 月 3 日（土）－4 日（日）に滋賀県高島市マキノにおいて 1 泊 2 日の合宿を実施した。

合宿では 5 つのワークショップを実施し、授業への導入教育とした。

ワークショップ 1 ：アイスブレーク・合宿中のチーム分け
ワークショップ 2 ：マインドマップで自己紹介
ワークショップ 3 ：コミュニケーションゲーム
ワークショップ 4 ：社会人インタビュー発表
ワークショップ 5 ：事前評価シート記入・アンケート回答

また、合宿中のアイスブレークやコミュニケーションゲームなど、受講生間のコミュニケーションを促進するワークショップでは、本学の F 工房（ファシリテーションの導入による教育効果の向上や、ワークショップの立案、実施などを目的とする専門集団）の協力を得て、より効果的なプログラムとなった。

◆チーム分け

PBL 授業ではチームで活動することが基本となるため、合宿後の通常授業では、1 クラス約 30 名を 1 チーム 5 名～6 名で成る 5 チームに分け、以後このチームを活動の基礎単位としてグループワーク中心の授業を展開した。

各チームでは選出されたリーダーがプログラムの進行やメンバーの出欠管理、提出物管理などチームの取りまとめ役を担った。

◆ゴールセッティングシートの記入

毎授業時に、ゴールセッティングシートを記入。

＜授業開始時＞

この時間の目標の記入と、特に意識しようとする社会人基礎力の能力要素に○印

＜授業終了時＞

「承認タイム」を設け、チームメンバーからその日自分についてよかったと言われたこと、自分でよかったと思えることを記入。

また、月曜 1 限の授業であることから、今週 1 週間目標としたいことや気になりながら取組めていなかったことを、勉強、日常生活、友人関係、クラブ・サークル、アルバイトの各項目に沿って記入。

また、このゴールセッティングシートは毎回提出し、教員がその学生の良かった点を中心にコメントして次回返却。他者から承認を得る機会の一つとするとともに、学生と教員のコミュニケーションシートの役割も果たした。

◆“遅刻・欠席ゼロプロジェクト”の立ち上げ

月曜１限目の授業であるため、まずは授業に遅れない、欠席をしないということが学生にとっては大きな課題となった。

そこで、単に「遅刻や欠席をしないこと」を教員から押し付けるのではなく、「どうすれば遅刻、欠席をゼロにすることができるのか？」という課題を与え、その方策を学生自身に話し合わせた。この際の留意点は「気合を入れる」「忘れないようにする」といった単なる精神論ではなく、具体的に行動できるレベルにまで落とし込むこととした。

結果的に学生はチーム内で連絡網を作ったり、遅刻している学生と連絡を取り合って登校を促すなど半年間常に時間について意識し続けることができた。

◆FA（ファシリテーションアシスタント）制度の導入

前年度（H20 年度）の PBL プログラムを受講した学生のうち、4 年次生でかつ進路が決定している学生を対象として、本 PBL1 で授業の手伝いをしてもらえる学生を募集したところ、8 名の応募があり、合宿及び通常授業で FA（ファシリテーションアシスタント）としてアシスタント役を依頼した。

＜期待する内容＞

・ディスカッションやグループワークの際のファシリテーション
・1 年生の大学生活に関するアドバイザー的役割
・受講生の良いところ、長所を積極的に見つけて言葉で返す承認の役割
・PBL の経験を踏まえた就職活動の経験談など

FA 依頼にあたっては以下の点を意識してもらった。

・温かい態度
・規律性の模範
・承認スキル
・傾聴スキル
・見守りの態度

◆朝のアイスブレーク

学生の中から毎回担当者を決めて朝のアイスブレークを実施し、授業のウォーミングアップとした。

また、2 人～3 人 1 組となってこの 1 週間楽しかったことや良かったことを毎回話すことで肯定感の醸成を図った。

２.具体的なスキルの習得

◆グループワークの体験

5 人～6 人を 1 チームとし、授業内で各種グループワークに取組み、ディスカッションや役割分担、意思決定プロセスなどを体験するプログラムを用意した。

例 1）コンセンサスワーク　『月で遭難したときどうしますか』

例 2）コミュニケーションワーク　『デートプランを考える』

◆エクセル集計、グラフ化演習

アンケートプロジェクト（後述）で学生が取ったアンケートを題材としてエクセルの集計、グラフ化のための演習授業を設けた。

エクセルの使い方講義は、3 年生の PBL 受講修了生に依頼した。

◆プレゼンテーショントレーニング

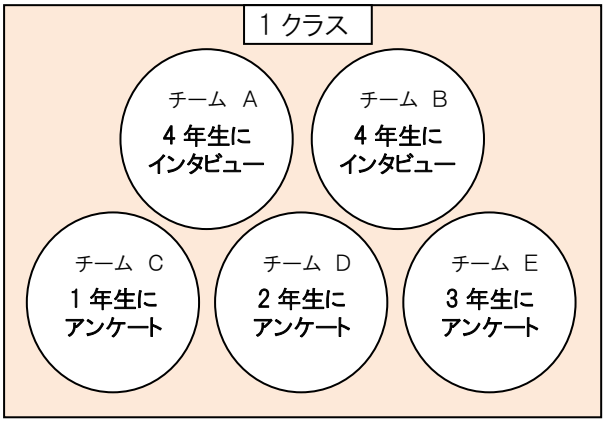
プレゼンテーションをする際、資料の作成のみが意識されがちとなり、当日のパフォーマンスにまで手が回らなくなるため､最終報告会を前にトレーニングを実施した。

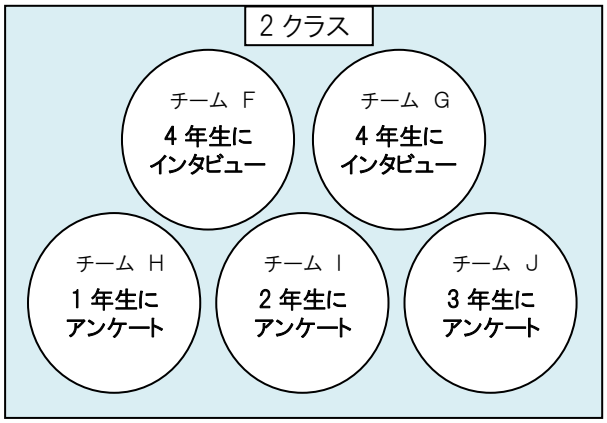
当日は、歩き方、立ち姿勢、声の出し方・大きさ、視線の配り方、話すスピード、などについて教員から指摘するとともに、学生同士でもプレゼンテーションの感想を発表しあうことで課題を明らかにし、最終報告会に臨んだ。

３.インタビュー・アンケートプロジェクトの実施

PBL1 のメインプロジェクトとして、大学生活にかかわる様々な項目をテーマに、1 クラス 5 チームのうち 2 チームはインタビューを、残り 3 チームはアンケート調査を実施し、この結果を最終報告会でプレゼンテーションした。

このプロジェクトでは、インタビュー及びアンケートで得られた回答内容の集計や考察の作業を通じて、チームワークや礼儀作法、PDCA サイクルでプロジェクトに取組む手法などを学んでいくことを目的としている。





◆インタビュープロジェクト

本学 4 年次生を対象として大学生活に関するインタビューを実施し、1 クラス 2 チーム（計 4 チーム）がこれに取組んだ。

主なインタビュー項目は以下のとおり。

1. 就職活動について
（1）就職活動での企業の選択基準について
（2）就職活動中の気付きや成長したと感じること

2. 大学生活について
（1）大学生活を振り返ってやっておけば良かったと思うこと
（2）大学生活で 1 番楽しかった思い出は？

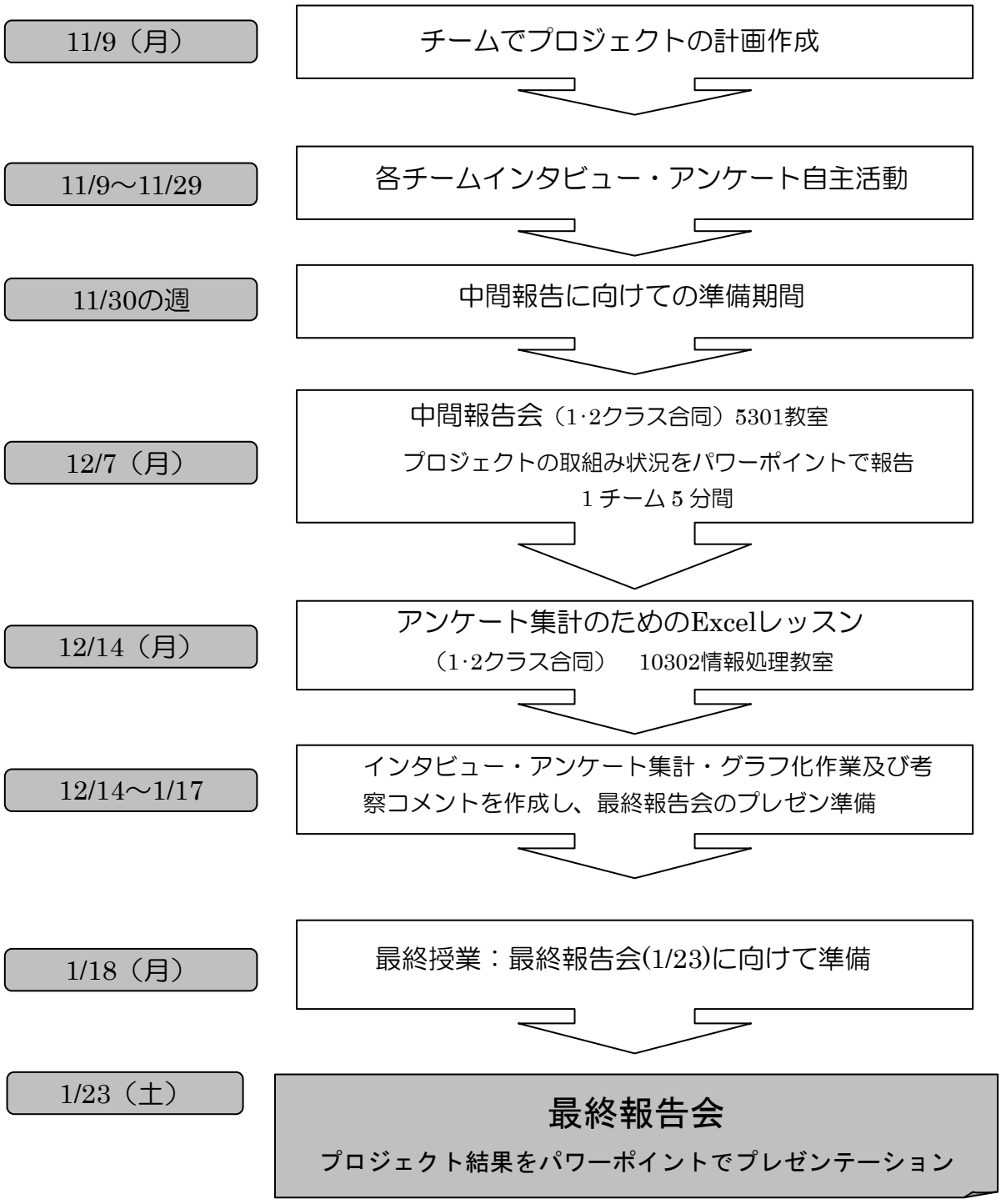
3. 人・言葉について
（1）大学生活の中で家族・友人・先生・先輩などに言われたことで心に残っている言葉
（2）大学生活をふり返って、今感謝したい人

4. 将来について
（1）目指す社会人像
（2）将来の夢

◆アンケートプロジェクト

本学 1～3 年次生を対象として、現在の生活に関すること（住居、通学手段、朝食、睡眠、アルバイトなど)、勉強に関すること（勉強時間、勉強方法、良いと思う授業など)、課外活動など学生生活に関するアンケート調査を実施し、1 クラス 3 チーム（計 6 チーム）がこれに取組んだ。

◆プロジェクト実施の流れ



ⅱ）支援員（教職員等）によるファシリテート

1. クラス内コミュニケーションの活性化

◆ニックネーム

最初の授業で人から呼んでもらいたいニックネームを各自に考えさせ、授業内ではその名前で呼び合うこととした。

ニックネームの命名は様々なワークショップで用いられるが、短時間でコミュニティ内の空気を打ち解けさせることのできる、効果的な手法である。

◆アイスブレーキングの持ち回り

アイスブレーキングは授業の冒頭5分程度で毎回簡単なゲームなどをして場の緊張をほぐしたり、脳と身体を活性化したりすることが目的である。

毎回その日の担当学生がリードする形式で実施した。「場をほぐす」という本来の効果に加え、学生が自らクラスをリードしたり、予めゲームをシミュレーションして当日に備える、などの要素も含んでいる。

（参考『楽しいアイスブレーキングゲーム集』 三浦一朗 著 (財)日本レクリエーション協会 発行）

2. モチベーション維持

◆ゴールセッティングシート

前述のゴールセッティングシートの活用は学生のモチベーションを維持する上でも有用であり、特にその1週間の目標を書くことで学生生活の目標が明確になった、という声が聞かれた。

◆ほめる、承認する

これまでほめられた経験が少ない学生は、自己効力感に乏しく、物事を最後までやりきった達成感を味わうことが少ないため、途中で投げ出してしまう傾向にある。本プログラムでは、小さなことでもできたことやうまくいったことは積極的にほめ、「できた」という経験を積み重ねられるよう配慮した。ポイントはできるだけ具体的にほめること。例えば、単に「積極的に発言していた」ではなく、「○○くんの□□という発言でディスカッションの方向性が見えてきた」のように何ができたのかを明確に指摘する。

このほめるという行為は教員から学生へ一方通行的に行うだけでなく、例えば発表の時などに拍手を促したり、どこがよかったかをコメントさせるなど、学生間でも互いをほめあうという習慣がつくように意識した。

最終報告会の終了時には、全授業を通じて無遅刻・無欠席だった者の名前を読み上げクラス全体の中で賞賛するなど、普段の見えない努力が認められているという実感を持てるよう配慮した。

ⅲ）支援員の育成（指導）力向上のための工夫

毎授業終了時には「PBLメソッドミーティング」を担当教員間で実施し、授業の振り返り、次回以降の授業確認を行った。

③ 育成手法の反省事項と改善策

ーメインプロジェクトの内容についてー

今年度はメインプロジェクトとして各クラス 5 チームのうち、3 チームは数十名から数百名規模のアンケートとその集計作業を、残り 2 チームは 4 年次生を対象としたインタビューを実施した。

アンケートについては時間の関係からアンケートシートを教員側であらかじめ準備したものを使用したため、学生は配布と回収、集計という単純作業がその大部分を占めることとなり、決められた作業をチームで最後までやり抜くことが鍛えられた反面、考え抜く力を十分に発揮させることができたとは言いがたい。

一方、インタビューを実施したチームはサンプル数は十数人ながらも一人一人に違った質問を投げかけ､その話を掘り下げるという非定型的で展開予測のつかない作業に取組み、また上級生の大学生活の体験談を生で聞くことができたことから、多くの示唆を得てその満足度も高かったようである。

このことから、今後のメインプロジェクトでは全員が何らかのインタビューを実施できる方向を探ってもよいと思われるが、同時に多数の受講生が取組める方法論も引き続き検討課題として挙げられる。

（２）社会人基礎力の評価手法について

① レベル評価基準

この取組にあっては、社会人基礎力の評価は次の二つの側面からなされた。したがって、測定方法やレベル評価基準はそれぞれの側面によって異なっている。

ⅰ）**外面的評価**：「○○できる」という見える部分のモニタリングによる評価

この取組のレベル評価基準には、経済産業省のもの（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』28―29 頁）をそのまま用いた。

ⅱ）**内面的評価**：「○○できる」能力を内面から支えている知的・精神的側面の検査による評価

社会人基礎力三つの力のうち「考え抜く力」を内面から支えている知的側面（頭の働かせ方）を CRATTI（適性科学研究センター）で測定し、測定値を偏差値（平均＝50、標準偏差＝10）であらわす。また、社会人基礎力三つの力のうち「前に踏み出す力」と「チームで働く力」とを内面から支え、社会人基礎力を行動に結び付ける精神的側面（精神的タフネス）は PC-TAOK（適性科学研究センター）で測定し、測定値を偏差値（平均＝50、標準偏差＝10）であらわす。

CRATTI は人間の知的能力を「頭の働かせ方（知能構造)」の観点からとらえ、その特徴を次の 2 側面から測定する。

ａ．収束的思考

正しい答えを求めようとする頭の働かせ方

ｂ．発散的思考

いろいろな答えを求めようとする頭の働かせ方

また、PC-TAOK は、人の精神的タフネスの程度を人との係わりに起因する負荷に耐える強さとしてとらえて、人との係わりを次の 3 つの切り口でとらえている。

ａ．自分と自分との関係

自分と自分との関係が、自己信頼度と自己表現度との 2 軸でとらえられる。検査は、アイデンティティの発達度をこの 2 軸で測定し、自己実現の欲求の表われ方（自己表現スタイル）の特徴を示そうとしている。精神的タフネスの観点からいえば、自分対自分の関係に起因する負荷に対するタフさが測定されているということになる。

ｂ．自分と他者との関係

自分と他者との関係が、他者信頼度と他者援助度との 2 軸でとらえられる。検査は、コミュニケーション能力をこの 2 軸で測定し、コミュニケーションの欲求の表われ方（対他者交流スタイル）の特徴をみようとしている。精神的タフネスの観点からいえば、自分対他者の関係に起因する負荷に対するタフさが測定されているということになる。

ｃ．自分と集団との関係

自分と集団との関係が職務遂行傾向度と対人親和度との 2 軸でとらえられる。検査は、コーピング能力をこの 2 軸で測定し、モチベーションの欲求の表われ方（対集団行動スタイル）の特徴をみようとしている。精神的タフネスの観点からいえば、自分対集団の関係に起因する負荷に対するタフさが測定されているということになる。

② 評価実施要項

すでに述べたように、この取組にあっては、社会人基礎力の評価は外面・内面の二つの側面からなされ、実施要領もそれぞれ異なっている。

ｉ）外面的評価

ａ．自己評価

◆評価の回数・時期

事前、事中、事後の 3 回実施された。実施時期については以下の通りである。

・事前自己評価：学期開始時
・事中自己評価：学期中間
・事後自己評価：学期終了時

◆学生が自己評価に慣れるために行った工夫

次のような工夫がなされ、自己評価についての学生の戸惑いは見られなかった

下記の工夫に効果があったものと思われる。

・学期初めのオリエンテーション時に、社会人基礎力レベル評価基準表（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』28～29 頁）を配布し、説明を徹底した。
・毎授業時間の開始に当たり社会人基礎力ゴールセッティングシート（**資料２－①・②**）を記入させ、授業終了時に振り返り（**資料２－①・②**）を行う。

ｂ．他者評価

◆評価者

この取組は次の 2 クラス（1 年次生）で実施され、それぞれのクラスに 1 名の担当者をつけて、その担当者が他者評価を行った。

・1 クラス（29 名）：クラス担当者：コーオプ教育スタッフ
・2 クラス（28 名）：クラス担当者：コーオプ教育スタッフ

◆評価の回数・時期

事中、事後の 2 回実施された。実施時期については以下の通りである。

・事中他者評価：学期中間に実施された中間報告会時
・事後他者評価：学期終了時に実施された最終成果報告会時

◆評価の方法

・チーム担当者による評価は、授業時や授業時外でみられる学生の日常の行動を対象にして、モニタリングで実施した。

◆評価者の評価力向上のための工夫

社会人基礎力育成・評価に関する情報共有と評価者の評価力向上のために、事前に、全関係者（企業側担当者、チーム担当者、事務局スタッフ、第三者評価委員、社会人基礎力普及推進委員、近畿経済産業局担当メンバー）による全体会議を開催した。その会議で、この取組の概要を説明するとともに、「社会人基礎力育成のための評価システムと実施日程・手順」（**資料３**）と題し、ファイルに綴じた保存用資料を配布して評価に関する解説をした。

◆適切かつ効率的な評価の実施のための工夫

12 要素を個々に評価するのは非常に困難なので、評価項目を圧縮して、3 つの能力に簡略化した。

ⅱ）内面的評価

全員を一つの教室に集め、CRATTI および PC-TAOK（何れも適性科学センター）を実施した。

・事前評価：学期開始時　90 分
・事後評価：学期終了時　90 分

実施後は、検査用紙を回収し、適性科学センターに郵送した。約 2 週間後に、測定結果とその解釈とが返送されてきた。

③　成長の記録・評価のフィードバック方法

ｉ）プログレスシート

◆様式

経済産業省のモデルをそのままプログレスシートとして用いている（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』47～48 頁）。

◆記載の流れ及び記載要領、フィードバックの方法（タイミング・内容）

プログレスシートは受講生のあゆみと成長の記録である。したがって、この取組が終了し、事前・事中・事後評価シートなどすべての記録が整った段階でチーム担当者が記載した。各項目の記載内容は以下の通りである（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』48 頁）。

【プロジェクトの活動内容、目標】

事前評価シートにある同じ項目を転載した。

【自己評価の履歴】

事後評価シートに、学生が授業全体を振り返って、自身の成長について記したものを転載した。

【活用した（学んだ）専門知識やスキル等】

事後評価シートの同じ項目を転載した。

【（チームとしての）活動成果】

事後評価シートの同じ項目を転載した。

【プロジェクトでの役割・担当としての活動】

事後評価シートの同じ項目を転載した。

【他者評価の履歴】

・中間レベル、事後レベルの欄
事中、事後評価シートにある「教員の評価」から転載した。

・具体的行動事実の欄
事中、事後評価シートにある教員のコメントを活用して記載した。

◆プログレスシート活用の可能性とその具体的工夫

・その内容を、今後必要になる自己ＰＲなどに活用した。

◆学生が記載に慣れるための工夫

・経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』（28～31 頁）を活用して、予め、事例を示した。

・授業開始時にゴールセッティングシート（**資料２－①・②**）を配布し、それに、その時間の行動目標を記入した。そして、終了時に振り返りを行い、その結果をゴールセッティングシートに記入した。上記事例を頭に置いて、これを毎時間繰り返すことにより、自己評価にも慣れ、自身の行動を振り返り、文章化する力も向上した。

ⅱ）評価シート

◆様式

経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』、44～46 頁）をそのまま活用した。

◆記載の流れ及び記載要領、フィードバックの方法（タイミング・内容）

【事前評価シート】

・事前評価シートを、提出 1 週間前に、記入方法が例示してある経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』44 頁）のコピーを付して学生に配布した。
・学生は、記入方法の例示にしたがって事前評価シートの学生本人記入欄に記入して、1 週間後の授業で担当者に手渡した。
・事前評価シートを受け取った担当者は、教員・講師からの講評・アドバイス欄に記入したのち、一部のコピーを残して、原本を次週の授業で返却した。

【中間評価シート】

・学期の中間で、担当者は、記入方法が例示してある経済産業省の様式（経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』45 頁）のコピーを付して、中間評価シートを学生に配布した。
・学生は、記入方法の例示にしたがって中間評価シートの学生本人記入欄に記入して、1 週間後の授業で担当者に手渡した。
・担当者は、受領後速やかに、教員記入欄に記入した。記入に当たっては、レベル評価の結果だけではなく、評価根拠も記載した。
・担当者の記入完了後、1 部コピーを残し、速やかに原本を学生に返却した。返却に当たっては、口頭でコメントしながら、学生のモチベーションを高める配慮をした。

◆学生が記載に慣れるための工夫

経済産業省編著『今日から始める社会人基礎力の育成と評価』（28～31 頁）を活用して、予め、事例を示した。

また、毎授業開始時にゴールセッティングシート（**資料２－①・②**）を学生に配布し、それに、その時間の行動目標を記入させた。そして、終了時に振り返りを行い、その結果をゴールセッティングシート（**資料２－①・②**）に記入した。上記事例を頭に置いて、これを毎時間繰り返すことにより、自己評価にも慣れ、自身の行動を振り返り、文章化する力も向上した。

ⅲ）活動記録シート

毎授業時間にゴールセッティングシート（**資料２－①・②**）を記入させ、担当者が確認のうえ、次週にフィードバックしているので、これを活動記録シートに代えた。

（３）授業や活動の具体的記録

＜プログラム構成＞

日程	授業中の活動（または授業外の自主活動）	育成する能力要素
10 月 3 日 10 月 4 日	合宿（滋賀県・ﾏｷﾉﾊﾟｰｸﾎﾃﾙ&ｾﾐﾅｰﾊｳｽ） アイスブレーク　マインドマップで自己紹介 コミュニケーションワーク 社会人インタビュー発表 事前評価シート記入　アンケート	主体性、発信力、傾聴力、 柔軟性、情況把握力、規律性、 ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
10 月 12 日	オリエンテーション、遅刻欠席ゼロ Pjct	主体性、計画力、規律性
10 月 19 日	コンセンサスワーク（『月で遭難』）	課題発見力、計画力、創造力、 発信力、傾聴力、柔軟性、 情況把握力
10 月 26 日	コミュニケーションワーク （『デートプラン』を立てる）	主体性、課題発見力、計画力、 創造力、発信力、傾聴力、 柔軟性
11 月 9 日	インタビュー・アンケート Pjct　立上げ	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、発信力、 傾聴力、柔軟性、情況把握力、 規律性
11 月 16 日	インタビュー実践	主体性、働きかけ力、実行力、 計画力、発信力、傾聴力、 柔軟性、情況把握力、規律性、 ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
11 月 30 日	中間プレゼンテーション準備	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、発信力、 傾聴力、柔軟性、情況把握力、 規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 7 日	中間プレゼンテーション （司会等自主運営、各チーム進捗状況発表）	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、発信力、 傾聴力、柔軟性、情況把握力、 規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 14 日	インタビューまとめ、アンケート集計 Excel レッスン	主体性、実行力、計画力、 情況把握力、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
12 月 21 日	最終報告会準備／中間評価シート記入	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、発信力、 傾聴力、柔軟性、情況把握力、 規律性、ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
1 月 18 日	最終報告会プレゼンリハーサル	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、創造力、 発信力、傾聴力、柔軟性、 情況把握力、規律性、 ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力
1 月 23 日	最終報告会	主体性、働きかけ力、実行力、 課題発見力、計画力、創造力、 発信力、傾聴力、柔軟性、 情況把握力、規律性、 ｽﾄﾚｽｺﾝﾄﾛｰﾙ力